

俳句

福田 蓼汀

萩市
(1905～1988)



【著作】

句集『山火』（昭和23・かに書房）
句集『秋風挽歌』（昭和45・角川書店）
『福田蓼汀全句集』（昭和59・牧羊社）ほか

福田蓼汀（幹雄）は「自筆略年譜」において、後陸軍中将となった父と母について「共に毛利藩士族」と記している。その出生は蓼汀にとって生涯の誇りであったと同時に、一方ではみずから束縛する枷でもあった。蓼汀の俳句への深まりもこうした状況下で捉えられる。小学校時の蓼汀は父彦助の国内転勤のために転校を重ねたが、中学校は母の実家に預けられ、山口県立萩中学を卒業。次いで広島高等学校に入学し、当時考古学の権威であった京都帝国大学浜田青陵博士門下への進学を志すも、両親・親類の反対を受け、東京帝国大学法学部へ変更。しかし東京帝大には入学できず、東北帝国大学へ入学せざるを得なかった。失意の中で的大学生活は蓼汀にとって人生最初の屈折の時代でもあった。

蓼汀はまた大学時代から句作を始めていたが、就職、結婚を経て、『ホトトギス』同人に推されるなど、俳人としても進境著しく、昭和二十三年（一九四八）、四十三歳の時、俳誌『山火』を創刊、主宰した。しかし、勤め人としては、敗戦により壊滅的打撃を受けた会社において、労使関係の調停などで随分苦勞し、不本意な仕事を続けざるを得なかった。エリートであっただけに、その挫折感、屈折感は人一倍強かったと思われる。

蓼汀の作品の特徴でもある山岳俳句は、昭和二十七年（一九五二）の乗鞍岳行から毎年のように続いた山行から生まれている。第三句集『暁光』、続く第四句集『源流』が、蓼汀全作品中の頂点を示しているのは、山岳俳句が多いと言ふことばかりではなく、こうした生活との相剋葛藤からその作品が形成された時代であったからともいえる。

蓼汀の人生三度目の大きな挫折となったのは、父親に倣って山へ興味を示した次男の善明を奥黒部の遭難で亡くしたことであろう。しかし、その折り詠まれた句集『秋風挽歌』をはじめとする一連の作品は、愛息を山に奪われた悲憤の激情を表現して余すところがないものであった。

自らいふ「お坊ちゃん」気質と「頑冥固陋居士」の側面は晩年も健在で、ある意味、純粹でもあった。脳梗塞で倒れる前日まで句会指導の席にあり、最後まで現役の俳人として過ごした。みごとに大往生であった。

墓所は父母とともに蓼汀の最も愛した故郷萩市の菊が浜の波音が聞こえるところにある。

（文・岡田日郎）

『山火』創刊号（昭和23年）



直筆色紙



福寿草 家族のごとく かたまれり 蓼汀

福田蓼汀 年譜

（提供・岡田日郎）

9月10日、萩町一二八五番地（現・萩市）に生まれる。本名幹雄。父福田彦助、母ムメ（俳号無声女）ともに萩町の毛利藩士族。

東京・高千穂小学校入学、その後豊橋、会津若松、大阪へ転校。

4月、広島高等学校文科乙類入学。

父母の住む熊本六師団長官舎に帰省。母が会員の屑籠婦人句会で初めて作句。

東北帝国大学法文学部法科へ入学。井上白嶺の陽炎会を通じ、小宮豊隆水曜会のメンバーとなる。

東北帝国大学を卒業。草樹会に加わり、高浜虚子主宰の『ホトトギス』に拠る。

日本産業（日産）系会社に入社。爾来、日産コンツェルン諸会社に席をおく。

宮崎・青島神宮宮司の長友寛長女郎子と結婚。世田谷区下北沢に転居。

長男朝幸生まれる。初めての山行で八ヶ岳行に登る。昭和27年以後は毎年のように山行し、後年次男の山での遭難を乗り越え、三千メートル峰十四座に足跡を残す。

9月21日、高浜虚子命名の九羊会（中村草田男、松本たかし、川端茅舎、中村汀女ら九人）が発足し、メンバーとなる。また、『ホトトギス』同人に推され、俳人としての骨格が定まる。

次男善明生まれる。

3月、主宰誌『山火』創刊。

三男雅則生まれる。

1月句集『暁光』刊。2月『山火』百号記念号刊行。11月四誌（『山火』『年輪』『葉殻火』『青』）連合会結成。

11月10日『山火』二十周年記念大会開催。『山火合同句集Ⅰ』刊。

2月、前年奥黒部で遭難死した次男善明の葬儀・告別式をする。『俳句』11月号（昭和43年）の「秋風挽歌」30句により、第四回蛇笏賞受賞。

社団法人俳人協会設立、理事に就任。7月エッセイ集『黒部幻影』刊。

この年、入退院を繰り返す。

3月、句集『霞』刊。

4月、エッセイ集『黒部の何処に』刊。5月1～14日まで欧州旅行。

10月、『自註福田蓼汀集』刊。

8月、エッセイ集『銀箭金壺』刊。

2月、俳人協会副会長就任。10月『福田蓼汀全句集』刊。

11月俳人として勲四等瑞宝章を受章。

11月、谷川岳山麓・一の倉沢・湯檜曾川が、最後の山行となる。

12月12日、早蕨句会が最後の句会となり、翌13日朝入院。

1月18日、心不全により逝去。

福寿草家族のごとくかたまれり
水筒のろろんと鳴りて霧の中
秋風やいただき割れし燧岳
わが胸をふたつに断ちて華巖落つ
山豪雨全山滝となりけり
連嶺に礼して年の改まる
流水に凭りまどろめば風は秋
どっと落花しばらくとぎれ二三片

（選・岡田日郎）

明治38（一九〇五年）	大正2（一九一三年）	八歳
	大正8（一九一九年）	一四歳
	大正13（一九二四年）	一九歳
	大正15（一九二六年）	二一歳
	昭和3（一九二八年）	二三歳
	昭和6（一九三一年）	二六歳
	昭和7（一九三二年）	二七歳
	昭和13（一九三八年）	三三歳
	昭和14（一九三九年）	三四歳
	昭和15（一九四〇年）	三五歳
	昭和18（一九四三年）	三八歳
	昭和23（一九四八年）	四三歳
	昭和24（一九四九年）	四四歳
	昭和32（一九五七年）	五二歳
	昭和43（一九六八年）	六三歳
	昭和45（一九七〇年）	六五歳
	昭和46（一九七一年）	六六歳
	昭和51（一九七六年）	七一歳
	昭和52（一九七七年）	七二歳
	昭和54（一九七九年）	七四歳
	昭和59（一九八四年）	七九歳
	昭和62（一九八七年）	八二歳
	昭和63（一九八八年）	八二歳

福田蓼汀